大学出版

大学と社会を結ぶ　知のネットワーク

NO. 90
2012. 4
✻春

一般社団法人
大学出版部協会

THE
ASSOCIATION
OF
JAPANESE
UNIVERSITY
PRESSES

✻ 特集

大学出版部の組織運営

大学出版部の経営問題と
エディターシップ　小野利家　1

大学出版部をもつということ
東京外国語大学の挑戦　岩崎稔　6

自律的に大学の特色を発信する
武蔵野美術大学出版局の十一年　高橋陽一　11

学術成果の発信と大学出版部
北米の事例にみる沿革と変容　ポール・H・クラトスカ　16

✻ 連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム
喜国雅彦著・装幀原案・イラスト『本棚探偵の冒険』ほか
酒井道夫　表2

大学出版部ニュース　21

初版本、ナンセンスなフェティシズム

喜国雅彦 著・装幀原案・イラスト『本棚探偵の冒険』ほか

酒井道夫（二代目酒井九ポ堂）

帯には、著者の書き文字による惹句がところ狭しと踊り、同好の士の心をくすぐる。奥の『冒険』から順に、黄、青、赤と装幀の基調となる色が変化してきているが、さて『最後の挨拶』は如何に

「充実の造本！　極美・函・帯・月報＋著者検印（初回配本分のみ）」と謳う帯の惹句につられて『本棚探偵の冒険』（双葉社、二〇〇一）を購入したのがもう一〇年も前。その三年後に『本棚探偵の回想』（同、二〇〇四）、暫くあって昨年の八月にやっと『本棚探偵の生還』（同、二〇一一　簡易冊子体の『バスカヴィルへの旅』を別冊で同函に挿入）が出た。無論、全巻を所有している。「初回配本分のみ」の著者検印も、ちゃんと貼り付けられている。

この一〇年間、これらは「本棚のコヤシ」として雌伏してきたのだが、このシリーズはシャーロックホームズの轍を踏んだ企画なのだそうで、この度の『生還』を一区切りにして本舞台へと登場いただいた。ただ『最後の挨拶』がまだ未刊ではあるが、著者の果てしなく迸る古書談義が、果たして『最後の挨拶』で決着となり得るのだろうか？　これは大いに疑わしい。

各巻の帯に踊る刺激的な惹句の全てを抜き出せば、本稿に許されたスペースなど忽ち埋め尽くすだろうが、『生還』の帯には「こんな時代に無謀な造本!!」ともあって、本シリーズの際立った特徴を言い当てている。全巻丸背上製本、貼箱入りの贅沢に加えて、各巻毎に趣向を凝らした「月報」を添え、『回想』には「蔵書票」も付属している。そして『回想』以降の奥付には、年配者には懐かしい「検印廃止」まで刻され、お若いのに立派な蘊蓄ぶりだ。

戦前戦後にかけての推理小説初出の書物収集を主眼にしているらしいので、自ずと厳しい出版環境下で生まれた「仙花紙本」に強い関心が向けられる。それで本シリーズの装幀でも、仙花紙の味わいを再現したかったようだ。当然のことだが、私が抱くリアル仙花紙本体験とはいささかの乖離感がある。しかし、中途半端な「造本通」をひけらかすことなく、ひたすらミーハーなオタク心を満たしたい衝動が本書群の意匠を生み出したのだろう。今後、これに類する造本での刊行は難しいだろう。

時代は、こんな本造環境から決別しつつある。

■特集・大学出版部の組織運営

大学出版部の経営問題とエディターシップ

小野利家（大学出版部協会顧問・元京都大学学術出版会）

昨年秋（二〇一一年九月二九日～三〇日）、日本出版クラブ会館で「大学出版部初期研修会」が開催された。出席者は、大学出版部協会に未加盟の出版会と大学出版部を設立したいと努力中の大学などの関係者六大学七名、協会から山口雅己理事長ほか四部会長、在京出版部代表者、出版関係の業界紙記者など、合わせても計三〇名弱であり、研修会と名乗るにはいささか気の引ける小規模の集まりではあった。

研修会の目的は、新設大学出版部の前に立ちはだかる経営上の難問をできるだけ具体的に表面化させ、とくに設立後五年間ではどのような課題を克服しなければならないかを明らかにすることであった。その背景には、二〇〇〇年代に入って新設された協会加盟大学出版部の活動不振が顕在化したことと、そもそも新設大学出版部が協会への加盟をためらうケースが増え、出版部を設立しても実際は既存の商業出版社へのアウトソーシングに依存することが多くなったという事実があり、協会の拡充と大学出版部の新設促進の可能性について、改めて「経営」サイドから捉え返して問題の所在を探りたいということにあった。

大学出版部に関する全国アンケート実施

この研修会企画の発端は、二〇〇九年の夏季研修会（姫路で開催）に私が協会顧問として招かれ、懇親会での挨拶で、協会加盟促進を訴えたことにある。席に戻ると、隣席の山口理事長から「何か具体策があったら提案してほしい」と促されたので、その後半年ほどして、（一）大学出版部の設立に関して実態を把握する、（二）新規に大学出版部設立を考えている大学、および新設された大学出版部の基盤形成に資するため、大学出版部経営相談会のような研修会を実施する……この二つを協会事務局長（当時は代行で

あった三浦義博氏）に提案した。まずアンケートの実施が先行して事務局事業として承認され、二〇一〇年一一月に実施された。研修会は、一年遅れの二〇一一年九月に実現することになった。

実態調査の具体的な目的は、全国的規模で大学出版部設立についての関心と意向について知ることにあった。協会はわが国の代表的な大学出版部が加盟している唯一の「半公共機関」ではあったが、大学出版部の存置に関する全国の網羅的なデータを持ってはいなかった。したがって、二〇〇四年度の国立大学の法人化に伴って、大学の業務として研究活動の成果公開が位置づけられたことで出版部設立が促進されたという噂はあっても、それを裏づける数値的根拠はなかった。このため、大学出版部設立の可能性を考えうる大学全てにアンケートを実施することにした。現在、日本の大学数は約七五〇校あるが、うち協会に加盟している出版部のある大学、その構成校や未加盟でも出版部の存在が知られている大学を除外し、さらに大学の規模などを勘案して、最終的に二七五大学を調査対象とした。回答は一一一校から寄せられた。回答率は四〇％に達し、かなり効率の良いものとなった。その結果から、二点ほど興味ある結果を紹介しておこう。

このアンケートの対象校は、それまでのわれわれの認識では、失礼ながら「大学出版部の匂いのしない大学」ばかりであった。したがって、大学出版部に対する厳しい意見や、低い数値が頻出するものと思われたが、予測は少し外れた。まず、大学出版部の存置について

（1）貴学に大学出版部があるか

ある……一一校
ない……九三校

（2）過去に、出版部設立を検討したことがあるか

計画はあるがまだできていない……一一校
ある……一五校

（3）現在、出版部設立を検討しているか

順調に検討中……二校
検討中だが遅れている……二校
検討中だが困難な状況……四校

（1）は、この時点で新たに明らかになった大学出版部の数である。うち、四大学出版部については何らかの情報は入手できていたが、残りの七大学出版部はこの調査で初めて明らかになったものである。

次の（2）は、じつに意義ある数値である。過去に一五校が大学出版部づくりにチャレンジし、残念ながらそのいずれもが設立に至らなかったことを表している。理由を重複回答可で尋ねてみると、資金づくりがうまくいかなかった（八校）、組織づくりがうまくいかなかった（七校）、中核となる推進者がいなかった（二校）、その他（五校）ということであった。失敗の要因は、まさしく予測できたことであるが、全体で一五事例も数えるという事実の重さは

記憶されるべきであろう。ある意味では、いずれも「経営問題」による頓挫といえる。こうした実態を、せめて進行中の段階で大学出版部協会が把握し、協会側から何らかの支援策が取れなかったかと悔やまれる。

そして、現在進行形の状況がまさに（3）である。これを見ると、状況が一段と厳しいものになっていることがわかる。出版部づくりを検討している大学が八校あることは心強いが、順調に準備が進められているのが二校であり、四分の一に過ぎない。この数値は、大学出版部の新設問題に関する基本データとして真摯に受け止めておくべきことであろう。

次に、本論の標題と直接関わる問題で、このアンケートの結果から判明した事項について取り上げたい。設問は、「教員の研究成果公開をどのように促進すべきか」というものであった。回答のトップは、当然ながら「紀要や学会誌等の既存の発表機関の活用」（八〇％）で、次にかなり離れて「大学主催の公開講座や報告集の刊行」（三三％）が続く。じつは、注目すべきはこの第二位とさほど変わらない割合で「大学が出版助成をし、既存の学術書出版社で発表」（三二％）する、としていることである。そのあとに「いずれは、自前で大学出版部を作って」（九％）、「他の大学出版部を利用」（七％）がくる。つまり、残念ながら大学出版部は商業出版社の後塵を拝してしまっていることが、ここにも露骨に反映されている。

じつは、二〇〇〇年代に入って、いくつかの有力大学が大学出版部を立ち上げたが、商業出版社に資金を提供し編集機能を含め事実上丸投げの状態で外部委託（アウトソーシング）することが目立つようになり、実際にこうした傾向を如実に反映していたのである。

五年で出版部の経営基盤を築くために

研修会を開催するにあたって、三浦義博氏と私は、大学出版部の経営問題を正面から取り上げる以上、やはりしっかりしたテキストが必要であろうということで一致し、その製作と研修会の実施をセットで協会常任理事会に提案し、二〇一一年度事務局事業として承認してもらった。実際のテキスト（『大学出版部の設立から5年後の着地点を目指して』A4版六八頁）製作のための準備作業は、すでにアンケートを実施していた段階から進めており、資料入手のための取材などはほぼ終了していた。取材は時間的に余裕のある小野が主として行い、原稿執筆は三浦氏と小野とで分担し、二〇一一年六月にはほぼ完成した。

研修会初日の九月二九日は、第一部「テキスト研修」、第二部「三大学事例に学ぶミニシンポジウム」、二日目は第三部として「大学出版部と機関リポジトリ」と題した講演、そして第四部が総括会議に充てられた。ハイライトとなったのは、予想通り初日のミニシンポであった。参加大学出版部は、東北大学出版会、専修大学出版局、東京外国

語大学出版会で、大学出版部としての規模は決して大きくはないが、それぞれ特徴ある事業展開が注目されていたところばかりである。研修参加校と問題意識を共有できるはずであった。

東北大学出版会は座小田豊先生（出版会総務理事）が出席され、すでに「東北大学方式」として著名であった初版印税なし・著者買取制度の歴史的変遷を語った。一時は印刷原価を超えて出版会経費の一部を賄うほどであったものが、積極的な外部資金の導入や販売努力を通じてその買取比率を大幅に縮減し、出版会としても黒字経営に転換できたと報告された。専修大学出版局は笹岡五郎次長が出席され、いわゆる私立大学のさまざまな大学管理業務を行う株式会社の一部局としての出版事業の難しさに触れつつ、近年は大学と一体化した教材開発に新しい展望が見え始めたことを報告された。東京外国語大学出版会は、二〇一〇年秋に設立されたばかりで協会未加盟校であるが、岩崎稔先生（出版会編集長）自らが出席され、「人文学の復権」をモットーに、国立大学系の直轄出版部としてはおそらく初めての専任スタッフ登用を設立当初から実施した果敢な経営方針を披露された。

「経営」を前提にしてこそのエディターシップ

第一部のテキスト研修は、前半の大学出版部の現状分析については三浦氏によってつつがなく実施されたが、残念ながら私が担当した後半部の「初期五カ年間に何をすべきか」は、全くの駆け足で結論を声高に叫んだだけのものになってしまった。そこで、せめてその中核部分だけを取り出して誌面でのリカバリーを試みようと思う。

私が目指したのは、まず、現状のような市場環境では大学出版部の標準的な事業モデルがどれだけ経済的に厳しい状況に置かれるかを描いてみることであった。

私は設立後五カ年間の大学出版部の典型的な経営モデルを想定して、いわゆるキャッシュフロー（全体のお金の流れ）の初期モデルを、研修会の目的に合わせながら、事業規模は幾分強気に想定して描いてみた。初年度に四冊、二年目六冊、三年目一〇冊、四年目一〇冊、五年目一二冊と徐々に刊行規模の拡大を図っていき、それに応じて人員も、経費も原価も、そして当然ながら売上も増大するが、その際に実際のお金の動きはどうなるかを追求してみたのである（ただし、印税はなし、重版もなし、とした）。その結果は、五年連続で年間五五〇万円から八四〇万円の幅で赤字となり、五カ年累計で三五〇〇万円強のマイナスとなることが明らかになった（学術書・教科書・教養書という大学出版部の主要三領域の現在の市場性からいって、せいぜい初刷の七五％を売り切ることが限界であろうという設定に基づいた）。しかし、考え方によっては、専属の人員を雇用してなおかつ年間約七〇〇万円程度の赤字で済むということは、私にはむしろ希望の持てるシミュレーションで

あると思われた。

ここから先が議論の分かれるところであろう。

七〇〇万円の継続投資によって大学の研究活動の成果公開が可能だとして、それを自前で実施するか、第三者に委託するかという選択に迫られる。

私は、当然ながら前者の「自前」派ではある。というのも、学術書や教科書が、いま最も厳しい市場環境にあることをあえて前提にして、著者である研究者や教育者の成果（原稿）をいかにして市場性のあるものに変身させることが出来るかを希求することがエディターシップであり、とすれば、こうした課題解決をこそ内なる大学出版部が自らなすべきであると思うからである。ごく少数の関係者しか関心を寄せなかった論文を、市販されて一回り広い領野の研究者などにまで影響力を持つような「商品に仕上げる」こと、これこそが他ならぬ編集の力であろう。つまりは、最終的にはどこまで行っても「商品＝経営」と結びつかない学術書というのはありえないと考えるのである。そういう意味で、学術書においては編集力こそ経営の源であるといえる。

初期五カ年だけをみた数値的な経営モデルからすれば、少なくとも現状では損益的にはマイナスのビジネスモデルでしかない。であれば、同じマイナスモデルを、自ら引き取って大学の新しい機能とするか、外部化するかの分岐点は、おそらく大学の存在意義に関する危機意識の差ではないだろうか。内部化を選択した大学は、いわば教職員に総動員令を発して大学の情報発信力の復興を狙ったのであろう。いま、大学出版部を新たに設立するという冒険は、そうした決意をこそ要請していると思われる。

キッシンジャー
回想録
中国
（上・下）
ヘンリー・A.キッシンジャー
塚越敏彦，松下文男，横山 司，
岩瀬 彰，中川 潔 訳
巨大な隣人・中国との付き合い方が，ここにはある．
四六判・定価各2940円

倭国史の展開と東アジア
鈴木靖民
東部ユーラシア世界の中で考える日本古代史．
A5判・定価11,025円

吉益東洞の研究
—日本漢方創造の思想—
寺澤捷年
日本漢方創造の思想を解明する本格評伝．
A5判・定価7350円

水と日本人
鳥越皓之
今だから見えてくる，湧き水や井戸の底力．
四六判・定価2940円

『思想』の軌跡
—1921-2011—
『思想』編集部 編
雑誌『思想』の歴史から日本の思想をたどる．
A5判・定価4200円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
［定価は消費税5%込み］
http://www.iwanami.co.jp/

■ 特集・大学出版部の組織運営

大学出版部をもつということ——東京外国語大学の挑戦

岩崎　稔（東京外国語大学教授・出版会編集長）

「とにかくつぶしちゃいけない」——立ち上げに際してはただこの気持ちだけに駆られていたような気がします。東京外国語大学に出版会をなんとかスタートさせてから三年余り。あとさきわからないままひたすらジタバタして、いったんその騒ぎで舞い上がった埃もひととおり静まって、やってきたことをすこしは距離をとって眺められるようになりました。

1　ことの始まりは、亀山郁夫学長の鶴の一声でした。「ボクの年来の夢だったんだ。東京外国語大学出版会を作りたいから、調べてみて。」——この思いつきのためにスタッフが招集されましたが、そのなかでは、たぶんわたしがもっとも慎重だったでしょう。それには理由があります。さらにさかのぼりますが、かつてウニベルシタス叢書の翻訳の仕事をしていたとき、法政大学出版局の名物編集長であった稲義人さんによくお世話になっておりました。打ち合わせの日は、ひとしきり相談が済むと、きまって呑みに出ます。そんなある日「そもそも大学に出版会を作るのには何が必要でしょうか」とお尋ねしたことがありました。神楽坂かどこかの店だったような気がします。話している稲さんはすっかり酩酊、聴いているわたしも覚束ない酔眼で、傍目には酔っ払い同士が勝手に出来上がっているようにしか見えなかったでしょう。でも、稲さんの説明の内容は明快でした。大学出版会をスタートさせるための、切り詰めに切り詰めた最低限の条件とは「どんな本を出したいのかについてエディターシップがはっきりしていること。最低でも四千万円は準備して五年は頑張ること。それにかならず経験のある編集者を中心に据えて、あとは経理のひとと営業のひとを、両方、だめならどちらかひとりを雇うこと。これらが整わないと無理です」と言い切られたからです。

そんな記憶を頼りに論点を整理し、ついでに他大学の事情も調べて報告を出しました。「大学出版会はいい加減な思いつきでできるものではない。しかるべき条件を整えられないまま失敗するくらいなら、見送るべきである。もしそれに充当しうる予算があるのなら、民間の版元の苦境に配慮して、学術出版の助成制度にとどめるのがいい」という趣旨の、つれない結論でありました。

しばらくして亀山学長から応答がありました。「報告を読んでよくわかりました。しっかり検討してくれてありがとう。それでね、みなさんの意見をよくうかがったうえで、ボクは決断しました。東京外国語大学出版会を作ることにします。もうマスタープランにも入れちゃいました。ついては、あれこれ真剣に検討してくれたから、岩崎くん、君には立ち上げ役になってもらうよ」と言うのです。このひとは、いったいひとの言うことを聞いているか、と呆れましたが、それでもよく聞くと、エディターシップを大切にするということや、それなりの人員と財源を確保する意義は理解してもらっているようでしたから、そのまま「乗りかかった船」状態になり、気がつくと実現計画の担当者という役割を断りきれなくなっていました。それ以後は、できるかどうかの出版会ではなく、つぶしちゃならない出版会になってしまいました。

2　やると決まったのちに学長から漠然と提示された枠組みは、出版会を国立大学法人東京外国語大学の学術研究を支える事業のひとつとして位置づけ、各年度の運営費交付金のなかから毎年約八百万円は確保する、というものでした。実際の事業の推進にとってはとても潤沢とはいえない額ですが、当面それを五年間は保証し、その後に事業全体を点検評価し、見直すというわけです。資金の点では、八百万円×五年間＝四千万円でどうにかなりそうでしたが、稲さんの「教え」の核心である、プロの編集者を社会から招き入れ、エディターシップをもった組織にせよ、という点が通るかどうかには、気を揉みました。というのも、実

フェミニズムの政治学
ケアの倫理をグローバル社会へ
岡野八代　他者との非暴力的関係が政治の始まりだ。既存の政治を覆し新しい社会を構想。フェミニズム理論の到達点。¥4410

精神医学を再考する
疾患カテゴリーから個人的経験へ
クラインマン　比較精神医学の第一人者の知見に学ぶ新たな古典。現代精神医学の難局への貴重な助言。**江口重幸他訳**　¥4410

通訳翻訳訓練
基本的概念とモデル
ジル　世界中の大学で用いられる汎用性の高い名著。丁寧な解説で通訳翻訳プロ教育の指針を提供。**田辺・中村・松縄訳** ¥5250

ロマン・ロラン伝
1866-1944
デュシャトレ　20 世紀前半に多大な影響を与えた〈RR〉とは誰だったか。あるがままの像に迫る傑作評伝。**村上光彦訳**　¥9975

シモーヌ・ヴェイユ選集 I
初期論集：哲学修業
思索の深化熟成の過程を見渡す全 3 巻の選集。1 は師アランのもとで書かれた若き日の論考 24 篇。初邦訳。**冨原眞弓訳**　¥5040

ニールス・ボーアの時代 2
物理学・哲学・国家
パイス　コペンハーゲン精神の形成、亡命生活、核をめぐる情報公開の提唱まで、科学の巨人の後半生。**西尾成子他訳**　¥7980

大隈重信関係文書 8
とく－はっ
徳富蘇峰が西欧から宛てた74通、初公刊の中江兆民書翰、新島襄など 177 名 824 通。**早稲田大学大学史資料センター編**　¥10500

東京文京本郷
5 丁目 32－21　**みすず書房**
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税込）
http://www.msz.co.jp

際にわたしたちに先立って発足していた大学出版会のうちのいくつかは、当節の経費削減・合理化の風潮にしたがって、編集の仕事をアウトソーシングしてしまう方式をとっていたからです。それは、お金がかかる編集者は雇用しないで、出版する原稿だけ学内委員会の審査で決め、あとは民間の会社に委託すればいい、という発想です。本学でも、そうした考えのひとが出てくるたびに、出版会は独自のエディターシップをもった組織体としての自律性がなくては意味がないのです、と説得して回る必要がありました。結果として、経理や営業の要員は断念せざるをえませんでしたが、プロの編集者をひとり雇うという条件は死守し、アウトソーシング案は回避できました。

この出版会の設立計画については、トップにいる役員会の意志だけではなく、大学全体の同僚たちからも賛同を得るために、外国語学部教授会に対する説明会を幾度も開き、アジア・アフリカ言語文化研究所や留学生日本語教育センターなどの他部局にも足を運んで、機運づくりに努めました。なにしろ「八百万円あれば、語学の非常勤講師のポストを二十人分確保できるから、出版会などはもってのほかである」という教員の強硬な反対意見まであったのです。

出発にあたって、もうひとつの気がかりな前提条件がありました。将来、出版会としての事業のなかで上がってくる収益を、出版会のつぎの事業費の原資に加算するのか、それとも収益が出た分だけ翌年度の運営費交付金の配分を差し引くのか、という問題です。後者のやりかたでは、頑張って業績を上げればあげるほど条件が悪化するのですから、事業としてはなりたちません。民間的な手法でモティヴェーションを生みだし、中期的なスパンで未来が見通せるようにすることは不可欠です。そんな当たり前のことも、民間の版元を立ち上げるのとは違って、国立大学法人という窮屈な枠組みのなかで事を起こすためには一から説得しなくてはなりません。思ったより手間がかかりましたが、最期はどうにかわたしたちの意向を承認してもらうことができました。

3

二〇〇八年の四月に設立準備会を作り、そのうえで二〇〇八年の十月に東京外国語大学出版会が正式の制度として発足します。その過程で、実質的に切り盛りしていく編集者として、『週刊読書人』や『本とコンピュータ』で経験を重ねてきた竹中龍太氏を、年俸制に基づく特定有期雇用職員という制度で雇用しました。そして、出版会の「編集委員会」が実際の実務主体になります。わたしが編集長としてこの「編集委員会」を統括し、竹中龍太氏が副編集長、もうひとりの副編集長は近世史の専門家である吉田ゆり子教授でした。それ以外にも、西洋古典文学の岩崎務教授、日本語学の早津恵美子教授、そして情報理論の佐野洋教授が加わり、労を惜しまず企画の立案と調整、査読、校正実務を分担しあっています。

この「編集委員会」の上には、経営方針を定め、大学として責任をとって事業をチェックしていくために「運営委員会」が作られました。大学からは研究担当理事が運営委員長となり、財務担当理事や大学の会計課長も加わります。そこに「編集委員会」から、編集長、副編集長と図書館（学術情報課）の事務方が加わって、二つの委員会を有機的に連動させるというシステムにしました。

こうして、わたしたちの出版会は、国立大学法人の運営費交付金にもとづく学内制度という形態で動き始めましたが、そもそも出版会ですから、本を作らなくては話になりません。設立準備会の段階から、制度づくりの傍らで、有望な出版企画を育てることに腐心しました。そして、日本文学者の柴田勝二教授から申請があった『中上健次と村上春樹』、それに今福龍太教授の『身体としての書物』、亀山学長御自身の『ドストエフスキー　共苦する力』の書き下ろし二本を加えた三作品をキックオフ企画として、二〇〇九年四月までに公刊したのです。今福さんと亀山さんの本は、語りの文体を生かした人文知のシリーズを今後展開していくという計画から、「ピエリア叢書」を作ってそこに組み込みました。「ピエリア」というのは、ギリシア神話に出てくる知の生い立つ場所で、編集委員の岩崎務さんの発案です。とくに『身体としての書物』は、書物という存在についての刺激的な思考から生まれた作品で、わたしたちの出版会の立ち上げには相応しい作品と自負しています。同時に、出版会と本学の教員や学生との距離を埋める手段として『ピエリア』という読書冊子も作りました。毎年一回の発行ですが、年ごとに内容を充実させてきています。

4　出版会として本を作る側になったことで、わたしたちの感受性が変わりました。第一に、本に対する見方が格段に豊かになりました。内容もさることながら、活字の形や紙の風合い、物としての書物の手触りや形に敏感になり、また本が世の中に出た後の取次、書店、そしてその書店の棚、さらには返品という過程まで含めて、人文知と社会と

新刊案内

及川淳子＝著
現代中国の言論空間と政治文化
——「李鋭ネットワーク」の形成と変容
統制の下にある中国知識人の言論空間の動態と政治文化の諸相
七九八〇円

徐　阿貴＝著
在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成
——大阪の夜間中学を核とした運動
女性たちが運動の中から生んだ主体的言説と新たな公共圏を描く
五六七〇円

延近　充＝著
薄氷の帝国 アメリカ
——戦後資本主義世界体制とその危機の構造
経済、国際政治、軍事的諸要因から総合的に「新帝国主義」戦略の特質を分析
四四一〇円

加藤雅俊＝著
福祉国家再編の政治学的分析
——オーストラリアを事例として——
構成、戦略的アプローチにより、現代福祉国家を把握する理論枠組みを提示
六九三〇円

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

のかかわりをつねに考えるようになりました。本づくりのプロセスが、ひとつの循環として見えてきたのです。それとともに、こうした循環をたどりながら市民社会の血流となっている出版という文化を、さてこれからどういうふうに守り育てていくべきかという意識も強くなってきます。

出版会のオフィスは、いまでは学生も出入りして、なかなかにぎやかになってきました。それには、意図して試みた二つのことが奏効しているようです。ひとつは、設立の二年目から、将来は出版の世界に進みたいと思っている学生を募って、数人規模の枠で「出版実務研修会」を始めたことです。出版について集中講義をしたり、編集実務を体験させたりするだけでなく、出版社、書店、取次、印刷会社、紙問屋さんなどにそれぞれお願いして、見学ツアーもさせていただきました。もうひとつは、「日本の出版文化」という連続講義を外国語学部の授業に組み入れたことです。これは出版文化を多面的に考えさせることを目的としていますが、三百名近くの履修登録があり、反響にびっくりしています。もっとも、各回の講師として、東京大学出版会の竹中英俊さん、みすず書房の元社長の加藤敬事さん、平凡社の元編集長の龍澤武さん、『現代思想』の元編集長の池上善彦さんといったベテラン編集者をそろえ、これに装丁家の桂川潤さん、カリスマ書店員の紀伊國屋書店の吉田敏恵さんなどが続きますから、人気は頷けます。この「出版実務研修会」と「日本の出版文化」を通じて、出版会に興味をもった学生は、繁忙期にはアルバイトとして駆けつけてくるだけでなく、有形無形に出版会事業を取り巻いて応援してくれる層として育ちました。気軽に出版会に出入りしてくれる若者がいるということは、書物の未来にとっても頼もしいかぎりです。こうした効果は、経営効率やアウトソーシングばかり考えていた場合にはとても出てこなかったことでしょう。

5

出版会では、一般人文書、教科書、学術書だけでなく、アジアの新しい文芸作品シリーズにも挑戦を始めています。語学の教科書は大学の特性から、ぜひとも強化していきたい分野であり、目下ロシア語とアラビア語の決定版を準備中です。といっても、発足から三年半のうち、まだ十数冊出版することができただけです。一年の新刊点数をなんとか二桁にまであげることが当面の目標になっています。もちろん、楽観的なことばかりではありません。公刊した点数のなかで、なかなか売れないでいるものもあります。しかし、それはそれで考えがあって挑戦した意義ある作品だったのですから、当面の数字に一喜一憂していません。

何よりも、しきりに言われる人文学の危機、人文知の崩壊のなかで、大学出版会を作り、それを拠点にすることで、大学やその周辺に波風を立ててみるというのが、これでなかなか、新自由主義的趨勢に対する抵抗の戦略としては面白い、というのが、わたしたちの最大の発見でした。

■特集・大学出版部の組織運営

自律的に大学の特色を発信する——武蔵野美術大学出版局の十一年

高橋陽一
（武蔵野美術大学教授・出版局制作担当取締役）

二〇〇一年二月の「株式会社武蔵野美術大学出版局」への商号変更から十一年が経過した。

ユニバーシティ・プレスが大学の特色ある研究成果を発表することで貢献する機関であるのは当然として、問題は大学と社会にどう貢献するかにある。ユニバーシティ・プレスが大学の名を冠すると同時に独自の出版機関名を名乗るわけで、大学とユニバーシティ・プレスの健全な関係性として「経営」がテーマとなる。一般的な問題提起かも知れないが、芸術の世界には根強くパトロン願望というべき心性があり、発表や貢献という行為のための出費を他人に依存する傾向が目につく。美術大学のユニバーシティ・プレスも自律的な経営のあり方が課題であった。

累積赤字を引き継いだスタート

武蔵野美術大学は、一九二九年に「教養を有する美術家養成」（金原省吾）を建学の精神とする帝国美術学校として創立された。校名変更をした武蔵野美術学校は一九五一年から通信教育を開始し、一九五九年には武蔵野美術短期大学として通信教育を開設した。本学は六十余年の美術通信教育のパイオニアとしての歴史を誇るものであるが、この時期にはユニバーシティ・プレスは設置されず、大学名義や外部出版社により教科書が出されていた。戦前戦後の通信教育がユニバーシティ・プレスと連動した多くの大学と比べると、後れを取ったといえよう。

一九六二年に設置された武蔵野美術大学造形学部は発展と拡充をとげ、一九八三年三月に学校法人武蔵野美術大学は全額出資子会社として「株式会社ムサビ」を設立登記する。当初は法人の収益事業関連の子会社であったが、一九八七年三月に「株式会社ムサシノ出版」に改組される。これは休刊していた大学機関誌を美術雑誌『季刊武蔵野美術』

として、同七〇号から復刊するもので、名称どおり出版事業が目的であった。

『季刊武蔵野美術』は、美術デザインの総合雑誌として定評を受け、市販もされていた。私たちは同誌への誇りと愛着をもっているが、同時に本稿のテーマである「経営」という視点からみると、反省を記さざるを得ない。芸術界に影響を与える内容の一方で、同社の経営は営業利益でみると、一九九九年度決算で八五万円、二〇〇〇年度決算で一二〇万円の赤字であった。通学と通信の全学生分の『季刊武蔵野美術』は大学買上げであり、編集者も学校法人職員で人件費負担もなく、「株式会社ムサビ」以来の法人資産管理も引き継いでおり、本来的に赤字が発生する構造ではない。それでも赤字が毎年累積していたのである。原因は経営が「まずかった」のではなく、経営が「なかった」ためだ。取締役には法人理事が兼務するが経営の実務には携わらず、継続的な視点で役職員が注意力をもって経営することがなかったのである。私も非常勤講師になったときに季節ごとに『季刊武蔵野美術』を受け取って喜んだのだが、しばらくしてその雑誌が何百冊も研究室にほこりをかぶって放置されている様子を見て驚いた。私立大学が学生の授業料で成り立っているという前提からすると、経営の喪失は、同時に倫理の喪失でもある。

こうした誇りと反省の表裏の関係を見直す契機となったのが、短期大学部通信教育から造形学部の四年制通信教育への移行である。一九九九年より長尾重武学長により準備が開始され、二〇〇〇年からは前田常作理事長のもとに開設準備室が設置される。この過程で、教材編集班を率いた金子伸二班長らが教科書編集をすすめたが、開設申請と調査にあたった調査役の私から、ユニバーシティ・プレスへの移行を提案した。この提案は二〇〇〇年一二月八日の学校法人理事会で決定され、翌二〇〇一年二月に「株式会社ムサシノ出版」は、「株式会社武蔵野美術大学出版局」へと商号変更した。役員は従来の理事兼務から、毎月二回の取締役会を開催する実質メンバーへと移行した。小石新八理事・教授を代表取締役とし、本庄幹也企画部事務部長、大塚直文図書館事務部長、富松保文教務部長、高橋陽一を取締役とし、大畑洋総務部長を監査役とする体制となった。スタッフには、開設準備室教材編集班のメンバーと、一二〇号で休刊となった『季刊武蔵野美術』を支えた安達史人主幹らの出版編集室のメンバーが移行した。

この背景には、四年制通信教育開設をめざす前田理事長と長尾学長のイニシアティブとともに、新たな教育体制の確立のために従来のあり方を見直す学内の熱意があった。私自身は教育史研究者として東京大学出版会の基盤となった帝大プリント連盟や、東京大学協同組合出版部の活動を支えた方々からの聴き取りなどでユニバーシティ・プレスの活動に関心をもち、また東京大学出版会の方々にお世話になっていた。同会の長坂正幸氏をはじめとした方々にア

ドバイスをいただき、制作主幹として二〇〇六年に急逝するまで出版局を支えた黒沢哲夫氏を推薦していただいて経営体制を整備した。

初年度から課題

新しい出版局は、教科書編纂事業により二〇〇一年度決算で黒字転換をはたして、二〇〇二年四月に造形学部通信教育課程の教科書四九冊を一挙に送り出した。これはユニバーシティ・プレスとしての改組計画の成功であるが、通信教育課程開設の特殊事情による幸運ともいえるもので、その後の経営維持が当初からの課題となった。

実質的な運営体制としては、鷹の台校での毎月二回の取締役会と、吉祥寺校に勤務する編集・営業担当者による月に二回の会議（合同部会）を開き、経営と現場のマネジメント体制を継続した。編集にあたるスタッフが直接の編集実務の権限をもつとともに、取締役がすべての状況を毎回確認して経営にあたる体制である。両方の会議の文書作成を制作担当取締役である高橋が担当して、吉祥寺の会議に提出された文書は没になった企画も含めて全て取締役会に提出し、情報の共有をしている。また、二〇〇六年度からは「事業計画書」を取締役会で議決して合同部会に提起し、方針の共有を図っている。

出版は、初年度の通信教育課程教科書から、大学外部への市販と企画出版に拡大した。ムサシノ出版の時代は取次店の口座をもたず、学外の事業者に販売委託をしていた。そのため、取次店口座の開設からはじめ、まず教科書を市販することでユニバーシティ・プレスとして活動し、通信教科書に市販用カバーをつけて一般図書や他大学の教科書として普及させていった。会計上は二〇〇二年度から従来の「出版売上」を、市販のみの「出版売上」と大学内の印刷物受託による「テキスト作成請負収入」に区別して、それぞれの経営上の指標とした。

教科書以外の独自の企画出版を行う方針は、「美術大学のユニバーシティ・プレスとしての方向性」と「出版企画

枢機卿
ベッラルミーノの手紙
科学思想史への一つの扉
西藤 洋 著
コペルニクス、ガリレオ、ニュートンらがキリスト教的宇宙観を揺るがした科学革命の時代に交わされた科学者と聖職者の形而上学的論争を追う。 ◇5040円

ポイエーシス叢書60
翻訳のポイエーシス
他者の詩学
湯浅博雄 著
翻訳とは〈他者との関係〉を考えるテーマと結びついていることとして雑誌初出時に評判を呼んだ渾身の翻訳言語論を軸に、バタイユ論、ランボー論を併録した一冊。
◇2310円

〈長詩〉
遥かな「戦後教育」
けなげさの記憶のために
北田耕也 著
現代だからこそ、教育再生のために『山びこ学校』などの子どもたちの詩を通して改めて教育のあり方をふり返り、原点から子どもの本姿を見つめ直す。 ◇1890円

同時代史考
政治思想講義
加藤 節 著
ホッブス、ロックからヘーゲル、マルクスを経て丸山、福田、サイードまで、先哲の豊かな言葉をひきつつ現実を正義と悪に二項化する言説の支配に抗う。 ◇2310円

未來社 〒112-0002
東京都文京区小石川3-7-2
tel 03-3814-5521
http://www.miraisha.co.jp/
★出版図書目録無料進呈いたします★
※価格は税込

としての大学や社会での意義とともに、商品としての書籍という性格を明確にする」という判断基準を確認して検討を開始した。

この企画出版では、二〇〇四年に小久保明浩『塾の水脈』と網戸通夫『デザインの原郷』をはじめ、毎年数冊の刊行を課題として現在にいたっている。この分野では内容はもちろん、装幀にも努力を注いだ結果、寺山祐策編『エル・リシツキー』では第四〇回造本装幀コンクール審査委員奨励賞（二〇〇六年）、向井周太郎著『デザイン学』では竹尾賞第八回デザイン書籍部門優秀賞（二〇一〇年）、白石美雪著『ジョン・ケージ』では第二〇回吉田秀和賞（二〇一〇年）と第四四回造本装幀コンクール審査委員奨励賞（同年）、森山明子著『石元泰博』で第四五回造本装幀コンクール東京都知事賞（二〇一一年）を受賞した。

編集を支えるスタッフ体制については、当初から制作担当をおくとともに、二〇〇四年度からは営業担当を専任でおいた。出版物に関する「コスト意識」を役職員全体で確認するために、二〇〇六年度の事業計画書からは、「出版物の原価は、印刷製本・原稿料のほか、編集の人件費が含まれる」ことを明記した。この原則に基づいて、出版企画ごとに原価計算ができる実質的な体制をととのえるために経理部門を法人経理部門との兼務で強化した。公認会計士と相談を重ねて、二〇〇六年度決算から税法に基づいた「単行本在庫調整勘定」を導入している。

小規模ではあるが、大学グッズの作成も展開した結果、学内外に大学のイメージを伝えるための大きな効果を生み出している。二〇〇四年九月にはMAU（マウ）グッズという名称と方針を確立し、同年のバッグ（b-bag）をはじめ、スケッチブックなどの商品を作成している。校友会会員への通信販売や書店等のフェアでもこのグッズが歓迎され、美術大学としての彩りを添えている。

出版以外の事業と法人経営への寄与

出版以外の事業では、本来は「株式会社ムサビ」以来の収益事業があるはずだが、これも「出版局」に改組される段階では有名無実化していたので、法人・総務部関係者とともに文字どおり建て直しのための努力を払った。具体的には、学内売店等の契約を見直し、学校法人と出版局と当該事業者の三社契約により手数料が事業者より支払われる契約を確立した。ベーカリー売店や自動販売機の増設、駐車場やマンション経営の見直し、入札による画材店の導入など、収益の上がる収益事業という当然の状態に経営を戻すためには大きな努力が必要であった。二〇一〇年度決算では、一億六〇〇〇万円の総売上高のうち、出版以外の家賃、駐車場、手数料が五四〇〇万円を占めている。

経営の改善により決算上の黒字を出すことが可能となり、二〇〇二年度には五二〇万円の法人税等を支払い、以後も黒字決算を続けている。さらに二〇〇四年度から学校

法人への寄付金を支払うことが可能となった。これは法令に基づいて私学事業団を通した学校法人への寄付金として支出するもので、毎年二〇〇〇万円以上の寄付を行っている。二〇〇六年度以降の事業計画からは「経常利益の半額程度を寄付金とすること」をいわば公約として明示している。二〇一〇年度は三五〇〇万円、二〇一一年度も同額の寄付を行った。私は昨年までの九年間、学校法人の理事を兼ねたが、法人理事会への決算報告で「学校法人出資金の一〇〇〇万円に対して三五〇％の配当率に相当します」と説明してきた。

スタッフ全体としては、大学職員の出向を基本とする体制から、出版局が職員手当や業務委託費用を保障し、さらに独自に社員を雇用する体制へと移行を進めた。二〇〇六年には二名の社員雇用、二〇一一年には社員三名体制として、木村公子編集長、井土純子営業主任、渡部祐子制作担当が現場の中心となっている。吉祥寺のスタッフは編集が社員一名と業務委託二名、制作が社員一名、営業が社員一名、総務が法人嘱託（出版局負担）であり、鷹の台は五名の兼務法人職員（担当手当は出版局負担）である。代表取締役小石新八、制作担当取締役高橋陽一、取締役稲葉直、監査役池田菊雄は当初からの約束で無給である。

社員の雇用条件の改善は大きな課題であり、学校法人とは異なる勤務に合致するルールづくりが課題である。二〇一二年三月からは、法人職員にはない決算部門別成績に連動する成功報酬型のボーナスを「大入り袋」形式で、社員と業務委託者に対して制度化する。

大学出版局の経営の基本は、出版で独自に収益構造が維持されて、それが大学と社会に還元されることである。それは企業であれば当然のことだが、美術大学の出版局という特殊な環境において、大学の特性を生かしつつ、自律的な経営を守っていくことが重要なのである。

激動の時代を辿り
戦争と平和を学ぶ

日本軍事史年表 昭和・平成

吉川弘文館編集部編　昭和初期より現代にいたる約5000項目収録。
6300円　「内容案内」送呈

幕末明治見世物事典

倉田喜弘編　生人形、かっぱれ、凌雲閣…。民衆を魅了したエンターテインメントの世界。3150円

関東大震災を歩く 現代に生きる災害の記憶

武村雅之著　東京に今も残る関東大震災の爪痕に、受難と再生の記憶を辿る注目の書！　2520円

大震災と歴史資料保存

阪神・淡路大震災から東日本大震災へ
奥村　弘著　地域社会とのネットワーク構築を緊急提言。3360円

被災地の博物館に聞く

東日本大震災と歴史・文化資料
国立歴史民俗博物館編　博物館職員がレスキュー活動と修復方法を現地からレポート！　2625円

大好評のロングセラー

日本史年表・地図
児玉幸多編　1365円

世界史年表・地図
亀井・三上・林・堀米編　1470円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格5％税込

学術成果の発信と大学出版部——北米の事例にみる沿革と変容

ポール・H・クラトスカ（シンガポール国立大学出版局代表取締役）

【解説】ポール・H・クラトスカ氏は二〇〇二年からシンガポール国立大学出版局（NUS Press）の代表取締役を務め、*Journal of Southeast Asian Studies* 誌編集委員（一九九五―二〇〇二年）、アメリカアジア学会常任理事（二〇〇三―二〇〇五年）、英国王立アジア学会マレーシア支部（Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society）の評議員を歴任した。自身も歴史学者として同大学で教鞭をとり、*The Japanese Occupation of Malaya, 1941-1945*（『日本占領下のマラヤ 1941-1945』行人社、二〇〇五年）をはじめ四冊の著作がある。

クラトスカ氏には本誌の特集にあたり、おもにアメリカの沿革と現状をふまえ寄稿していただいた。大学の学術研究の成果公開を担う大学出版部の書籍は今日、極端な高定価商品となっている。電子出版の高コスト構造がこれに拍車をかけ、著者からの資金的支援や公的助成金への依存度を強めている。くわえて読者・図書館からは、対価がなく開放性をもつオープン・アクセスの要求をうけ、ビジネスモデルの確立をますます難しくしつつある。本稿はこうした構造変化が学術研究に与える影響を、アジアとの比較を交え冷静かつ複眼的に分析した。日本の大学出版部が国際化・電子化へ実践的に取り組むに際し、きわめて示唆に富んだ考察である。

（翻訳　東京大学出版会・山口雅己／解説・訳注　京都大学学術出版会・斎藤　至）

はじめに——北米の大学出版部

一九世紀末、北米の大学のなかにはみずからを「研究機関」と位置づけるものが現われはじめた。学術書のマーケットが商業出版社を惹きつけるにはあまりに小さいうえ、公表されない学術研究はなんの役にも立たないので、これ

らの「研究機関」はみずから出版活動にも手を染めることとなった。こうした学術書出版の重要性を認識した欧米諸国の政府は、大学出版部を非営利団体として遇した。

大学出版部は以前は自社内に印刷機能を有し、学術書に加え展示カタログや大学の組織運営に関する資料なども印刷していた。大学へのこうしたサービスの提供は、同時に出版部にとって補助的な収入の道でもあった。しかしながら活版からコンピュータ組版へという技術革新に要する設備投資には耐えられず、印刷は現在外注化されている。

五〇年前、大学図書館や個人読者に対する大学出版部の書籍売上は、経費をカバーするにじゅうぶんなものであった。多くの大学が学術出版のための寄付金制度を設置し、これらは学術出版にとって手厚い支援となった。しかしながら、二〇世紀末にかけて大学出版部の数が増大するとともに売上高は激減し、大学出版はいまや危機に瀕している。

北米の大学出版部は、査読を経て学術的な価値が確定された原稿を選び、出版する。売れるかどうかは二の次なのであって、新刊を一点出版するたびに平均して一万〜二万ドルの損失を計上する。各出版部は、寄付金収入や民間財団からの出版助成、大学からの補助、そして限定的ではあるもののその比率が増大しつつある著者からの助成金により、これらの損失をカバーするのである。

アメリカ大学出版部の現代的機能

二〇世紀末には、およそ一〇〇の大学出版部が北米にあった。学術書の出版・販売に加え、大学出版部はさらに二つの役割を演じている。第一に、出版部をもつことは大学のプレゼンスを高める。第二には、出版を通じてスタッフ教員による研究の質を保証することにより、大学教員の採用や任期付与システム[1]を正当なものとする。学術的な調査研究の成果公開は大学出版部によって最もよく成し遂げられる（そしておそらく大学出版部によってしかできない）という議論は、大学出版部の存在意義を正当化する主要な理由であったが、この前提はいまや疑われるに至っている。

藤原書店

ルーズベルトの責任㊤㊦
日米戦争はなぜ始まったか
Ch・A・ビーアド　「戦後の世界史を修正」する幻の名著、遂に完訳！
開米潤=監訳 ㊦粕谷一希=跋　各4410円

内村鑑三 1861-1930
別冊『環』⑱
新保祐司編　近代日本の根源的批判者。山折哲雄＋新保祐司／渡辺京二／猪木武徳／住谷一彦ほか　3990円

墓のない女
アシア・ジェバール　1950年代後半のアルジェリア戦争時、「ゲリラの母」と呼ばれた女闘士の愛と死の物語。　持田明子訳　2730円

「排日移民法」と闘った外交官
1920年代日本外交と駐米全権大使・埴原正直
チャオ埴原三鈴・中馬清福　日本唱導の「人種差別撤廃」案はなぜ欧米に却下されたか？　3780円

「民衆」の発見
ミシュレからペギーへ
大野一道　キリスト教的世界観を超える、“全生命は一つ”という世界観を提示する問題の書。　3990円

◎「エネルギー」概念そのものを問い直す。
学芸総合誌 季刊 **環** 歴史 環境 文明
vol. 48　2012年冬号
〈特集〉エネルギー・放射能
東日本大震災Ⅲ
イリイチ／トッド＋三神万里子／吉岡斉＋井野博満＋鎌田慧／大石芳野ほか
〈小特集 チャールズ・ビーアドとは何者か〉ビーアドほか〈鼎談〉李承雨＋川村湊＋金順姫〈書物の時空〉村上陽一郎ほか〈連載〉小倉和夫ほか　3780円

月刊 **機**
B6変32頁　2月号　No.239
加藤晴久／金子みすゞ／麻木久仁子／開米潤／太田素子／冠木雅夫／石垣金星／尾形明子／粕谷一希／山崎陽子／一海知義ほか
年間購読料2000円（送料込）◎見本誌・ブックガイド呈　＊表示価格税込
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013　TEL03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

学術出版の経済性

大学教科書はたいへん高価な商品に成り果て、いまや商業出版社によって扱われている。教科書販売はスケールメリットを生じ、利益の出る事業となっているのである。商業出版社は主要な学術雑誌の出版も独占しており、価格を上げることにより学術雑誌を利益の源泉としている。こういったことに関わる出版社の多くはヨーロッパ由来のコングロマリット企業であり、書籍・雑誌を少部数しか印刷せず、原価と経費をまかなったうえで利益を得るという現実的な要請からたいへんな高値で図書館に販売しているが、大学の図書予算に大きなプレッシャーを与えている。電子出版は学術出版に新しい要素を加味した。デジタル書籍の製作・販売には莫大な費用が必要となるが、ほとんどの大学出版部にはそれをカバーする余裕はなく、学術書を出す商業出版社がさらに有利となったのである。

これはあまりに法外な値付けではないかということで、大学あるいは学会では、出版物はオープン・アクセス・モデルのもとで生産されるべきであり、すべてのユーザーがデジタル・データを使用できるようにすべきであるとの構想を立ち上げた。二〇一一年一一月現在、オープン・アクセス・ジャーナルのディレクトリ（http://www.doaj.org/）には一一七カ国から七二五三点がリストアップされているが、そのほとんどすべてがＳＴＭ（理工・医薬系）分野のものである。東アジア、東南アジア、南アジアの一六カ国では八〇二点を占める。論文を無料で読めることはたいへん魅力的ではあるが、オープン・アクセス出版自体が無料でできるわけではない。デジタル出版には印刷、在庫保管、輸送の経費がかからないものの、オープン・アクセス・ジャーナルの出版者は紙面のレイアウトや販売促進、オンラインでの流通経費や一般管理費を回収しなければならないし、商業出版社であれば利益をあげる必要もある。そのため多くのジャーナルでは、掲載論文の著者に対し投稿料を課している。この投稿料は非常に高く、一論文につきだいたい三〇〇〇ドルとなっている。みずからの資金でそのような投稿料を支弁できる研究者はほとんどおらず、大学または政府からの資金提供を頼みにせざるを得ない。アジア諸国の場合のように、そのような資金提供が期待できないところでは、様々な情報を入手することができる一方、何を発表することもできないという状況が、オープン・アクセスにより招来される危険性もある。

北米の大学出版部は歴史的に、著者から助成金を受けることを良しとしてこなかった。このようなかたちの助成出版は出版部の独立性を危険にさらし、評判を害し得るからである。近年、あまりの財政難に直面しているがゆえに、大学出版部も著者からの助成金を受けるようになってきているが、査読により原稿の学術的価値が担保されなければならないという制約はかけている。一方で大学や学会が著

者に財政的援助を提供するようにもなった。

日本と中国では、大学出版部の運営モデルはすこし異なる。両国の大学出版部は母体大学のための教材を出版することから始まったからであるが、最近では調査研究に基づいた単行本の出版も増加している。日本の大学出版部は、日本学術振興会のような政府機関からの助成金や、大学独自の制度による助成金を調達することが多い[2]。中国では多くの場合、所属大学から助成金を引き出すことにより、著者が大部分の学術書に資金を提供する。

大学出版部のガバナンス

こうした状況により、大学出版部のガバナンスは方向づけられる。北米では通例、大学出版部は高い地位にある教員――一般的には学長あるいは副学長――の管理下に置かれるが、大学図書館システムの中に位置づけられることもある。出版部は独立して業務を遂行し、非学術的な判断材料が原稿の選択や出版に影響することを回避すべく、所定の対策が講じられている。

おわりに――脅威と課題

二一世紀初頭、大学出版は危機的状況にあった。売上高は減少し、出版が電子へ移行するという見通しは伝統的な出版形態に深刻な脅威をもたらした。それから一〇年を経た今でも、大学出版は脅威にさらされている。電子出版が重要なものとして成長を続ける一方、学生たちは周囲が期待するほどの熱意をもってそれを受け入れているわけではないし、学業に関しては伝統的な印刷物に依存している。しかしながら調査研究は、そのほとんどがオンラインで実行されている。研究助成機関は学術書の出版助成策を新たに打ち出しているし[3]、先述したオープン・アクセスは新しいビジネス・モデル開発の契機となる可能性がある。商業学術出版社は今後も専門書出版に重要な役割を演じ続けるであろうが、図書予算の削減や世界的な財政危機は、商品売上によって製作原価を回収するというビジネス・モデルの維持を、ますます困難なものにしてゆくことだろう。

訳注

（1）ここで言う「任期」とは北米の大学における終身在職権（tenure）をさすと思われる。人文社会系の学部では、教員の採用や昇進に際してモノグラフ（博士論文をもとにした単著書籍）の刊行を義務づけ、業績評価の要諦とすることが多い。

（2）日本では科学研究費補助金が学術出版を財政的に支える重要な制度だが、二〇〇七年から二年続けて大幅に削減される事態が生じた。これに対し日本の大学出版部協会では二〇〇八年六月、管轄する日本学術振興会と文部科学省へこの制度の継続と発展を訴える要望書を提出した。経緯と詳細は『大学出版』七九号の特集で、要望書全文は協会ウェブサイトで公開されている。

（3）学術情報の電子化とオープン・アクセスの潮流に対しては、日本政府も具体的な対応策を進めている。たとえば日本学術振興会では、おもにジャーナルを対象に学術情報の発信機能を強化する議論が始められている（二〇一二年一月二四日付作業部会資料）。

ナチュラルヒストリーの時間

大学出版部協会編　A5判／160頁／定価1680円

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーを愉しむ

I. Prologue of Natural History

第１話　自然を記録すること……斎藤靖二

第２話　自然史と本……青木淳一

第３話　日本のナチュラルヒストリー……岩槻邦男

　コラム①　動物写真の世界

II. History of Nature

第４話　ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司

第５話　マリー・ストープスの２つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子

第６話　京都の語り部：深泥池……竹門康弘

第７話　遺跡の土に秘められた情報……松井　章

　コラム②　ききみみずきん

第８話　遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀

第９話　ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人

第10話　日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

III. Diversity of Nature

第11話　サクラソウとマルハナバチ……鷲谷いづみ

第12話　日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和

第13話　琉球列島の自然史……太田英利

第14話　マンボウと標本……松浦啓一

第15話　分類学事始め：タクソン，タイプ，名前……馬渡駿輔

　コラム③　サルにノミはいない？　幻の定説

IV. Story of Nature

第16話　クマ大量出没の謎……大井　徹

第17話　ふしぎの国のアリ巣……丸山宗利

第18話　現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫

第19話　子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲

第20話　熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗

第21話　殿様の自然史……松岡明子

第22話　幻のロバと男たち……木村李花子

第23話　食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周　達生

　コラム④　アリジゴクの自然史

V. Epilogue of Natural History

第24話　遺伝子を通した動物との対話……村山美穂

第25話　ゲノム時代のナチュラルヒストリー……西田　睦

　コラム⑤　小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一

自然史文献リスト

大学出版部ニュース

●**第一五回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー**：第一五回三ヶ国セミナーは、日本での開催に向けて本格始動を始めた。会期は七月四日から六日。会場は東京国際展示場内会議室。東京国際BFとの共催となる。共通主題は「大学出版部の発展的再編と国際的共同」。二〇〇七年の第一一回韓国・光州セミナー以降不参加の中国大学出版社協会への参加要請とレポートの作成に向けた国際部会の尽力に協会全体で後押ししてゆきたい。

●**二〇一二年度定時社員総会**：二〇一二年度定時社員総会は五月二五日（金）に日本出版クラブ会館で開催される。事業並びに決算報告、事業計画、予算案の承認のほか、大学出版部協会創立五〇周年記念事業計画案の承認。新規加盟出版部の承認。理事任期の満了に伴う新理事の選出など、二〇一二年度定時社員総会は様々な重要議案を審議する場となる。協会創立五〇周年を迎える節目の定時社員総会でもあり、全社員新たな協会の歴史作りに参加いただきたい。

北海道大学出版会

▼原暉之編著『**日露戦争とサハリン島**』（A5判・三九九〇円）「戦場の諸相」の解明と、領有関係の変動により翻弄される住民の運命を軸に、全体史の再構築を目指す。〈スラブ・ユーラシア叢書10〉

▼李元範・櫻井義秀編著『**越境する日韓宗教文化―韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教**』（A5判・七三五〇円）日本での韓国系キリスト教の伸張や、韓国で創価学会が一四〇万人もの信者を獲得した理由に迫る、国際的研究の成果。

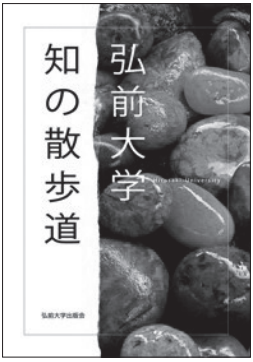
▼中尾佐助・西岡京治著『**ブータンの花新版**』（AB判・四七二五円）花や植物など豊かな自然だけではなく、現在では失われつつある伝統文化の一端が、鋭い視線で切り取られている。

▼佐々木隆生著『**大学入試の終焉―高大接続テストによる再生**』（四六判・一八九〇円）大学全入と高校の国民教育化がもたらした高大接続の機能不全に対処すべく、達成度テストの導入を提案する。

▼吉田克己著『**市場・人格と民法学**』（A5判・七九八〇円）一九九〇年代以降の日本法システムの変容を、市場の論理と人格的価値の相克から読み解く。

弘前大学出版会

▼『**弘前大学―知の散歩道―**』弘前大学出版会編（B5判・三二〇頁・定価二〇〇〇円）弘前大学を広く一般の方々に知ってもらえるよう、「人々」をテーマに魅力を掘り起こした弘前大学の紹介本。最先端の研究紹介のみならず、堅苦しさのない、バラエティに富んだ読み物をふんだんに盛り込んだ内容になっている。



▼『**写真集　弘前大学の四季**』「弘前大学の四季」制作委員会編（A4判・一二八頁・定価一〇〇〇〇円）

▼『**「資本論」研究―労働価値論・貧困の蓄積論・経済学批判―**』高橋秀直著（A5判・三二三頁・定価二五五〇円）。

東北大学出版会

▼渡部信一監修／東北大学大学院教育情報学研究部編『**高度情報化時代の「学び」と教育**』（A5判・四二〇〇円）二一世紀はじめの十年は、テクノロジーと人間の関係が急速に変化した時代だった。特に、デジタルテクノロジーが人間の「学び」や教育に与えた影響は、これまでの歴史にないほど大きなものだった。多くの実践例をもとに「eラーニングの理論と実践」「テクノロジーを活用した大学講義の実践」などを詳しく解説する。

▼信太光郎著『**死すべきものの自由――ハイデガーの生命の思考**』（A5判・三一五〇円）「言葉をもって生きるもの（ゾーオン・ロゴン・エコン）」の「自由」を、〈生命性〉の次元に捉えようとするハイデガーの「生命の思考」の展開を、テクストの詳細な読解を通じて明らかにする。

▼上野友也著『**戦争と人道支援――戦争の被災をめぐる人道の政治**』（A5判・三一五〇円）赤十字国際委員会の設立から、冷戦終結以降の人道的介入に至るまでの人道支援の歴史を追うことにより、戦争における人道支援がどのように発展してきたのかを解明する。

流通経済大学出版会

▼村田彰・植村秀樹編『**現代日本のガバナンス**』（A5判・三五二頁・三四六五円）

ガバナンスの概念は企業経営から国際政治まで、今日では社会科学の各分野で広く用いられるようになっている。本書は、法律学および政治学の諸領域における現代日本の抱える具体的問題を取り上げ、ガバナンスの視点から現状分析を行うとともに、ガバナンスの向上に向けて示唆を与えようとする論考を集めている。

取り上げる問題は、日米安保体制の運用、遺伝子組み換え作物の規制、地域コミュニティの形成、インターネット上の名誉毀損、温泉資源の保全・保護、入会林野の環境保全、気候変動とコーポレート・ガバナンス、そして司法制度改革と多岐にわたっている。

東日本大震災と福島原発の事故は、日本のガバナンスの危うさを国民ばかりか全世界に知らしめることとなった。あらゆる領域でガバナンスのあり方を見直し、その実現ないし改善に向けた努力が求められているが、本書はそうした課題に取り組むための政治学、法律学からの応答として読まれるべき一冊である。

聖学院大学出版会

▼枝野幸男著『**希望の芽はある―枝野幸男学生に語る**』（A5判・七三五円）

経済産業大臣、枝野幸男衆議院議員がこれからの日本を担う大学生たちに、現代日本の置かれた社会経済状況の中で、どのように考え生きるべきかを語りかけ、討論した記録。

今後も、戦後日本がとってきた輸出拡大による経済成長路線をとるのか、あるいは、脱経済成長をめざすのか。これは日本の進路だけではなく、大学生にとっては卒業後にどのような職業に就くかにも関わる重要な問題である。この問いに、経済産業大臣の立場から真摯に答える。アジアだけをみても新しく経済大国が生まれ、安く豊富な労働力によって、日本がたどってきた経済成長路線を歩む多くの国々が登場してきている。それらの国々に対抗して経済成長を遂げていくことは現実的ではない。むしろ日本の独自の技術力、新しい商品を開発することにより、新しい社会を生み出す希望がある。その「芽」は既に現れている、その芽を育てよう、と力強く語りかける。

大学生たちとの討論も興味深い。

聖徳大学出版会

▼特別支援教育研究室編『**一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援―**』（A5判・二〇〇頁・一六〇〇円）ハンディなサイズでありながら、特別支援に関する医学・心理学面の専門的な知識と保育・教育指導の実務に携わるのに必要な内容を網羅する。表紙のデザインやイラストには、本学の卒業生や学生を登用して、親しみやすい装丁に！

▼村井靖児著『**音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―**』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）

▼森彪著『**医における癒し―人間関係の形成のなかから―**』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）

▼高橋大海監修・Jソロイスツ歌唱『**親子で楽しむ唱歌集**』（音楽CD・三四〇〇円）

麗澤大学出版会

▼D・K・アイトマン他著／久保田政純・真殿達監訳『**国際ビジネスファイナンス〔第十二版〕**』（B5変型判・七五二頁・一〇五〇〇円）グローバリゼーションの中核をなす多国籍企業に焦点をあて、その財務活動を理論と実務から詳述。本書は、多国籍企業のリーダーを養成することを目標とする。米国での一九七三年の刊行後、版を重ねてきた超ロングセラーの本邦初訳。

▼倍和博編著『**永続企業の条件――環境変化に打ち克つ5原則**』（四六判・二一二頁・一六八〇円）株主市場主義は、企業に何をもたらしたか。行き過ぎた株主価値の追求は、経営理念やステークホルダー（利害関係者）を軽視した企業経営へとつながる。永続企業への調査とその分析・検証から、今企業に必要な5原則を提唱する。

慶應義塾大学出版会

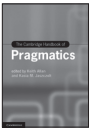
▼ジョーン・ディディオン著／池田年穂訳『**さよなら、私のクィンターナ**』（四六判・二〇八頁・一八九〇円）思い出は、慰めにはならない――。子を持つこと、子を失うこと、親であること、病、老い、そして、死、それらすべてに対する恐れについて、深い想いを綴る書き下ろし最新作。全米図書賞受賞の話題作『悲しみにある者』に続く、感動のノンフィクション。

▼加茂具樹・小嶋華津子・星野昌裕・武内宏樹編著『**現代中国研究シリーズ　党国体制の現在**』（A5判・二八〇頁・三九九〇円）市場経済化やグローバル化の波に柔軟に対応してきた共産党とは、どのような集団か。社会の変容に適応してきた権力構造と一党支配体制の現実を多面的に描き出す。

▼CDシリーズ慶應義塾の名講義・名講演、江藤淳講演『**江藤淳　漱石と近代日本文学**』（B5判変型・音声CD三枚＋解説冊子一六頁・五二五〇円）「漱石と明治の文学」「有島武郎と大正の文学」「漱石の文学」という慶應義塾大学での講義を中心に収録した音声CD。戦後日本を代表する文芸評論家江藤淳の肉声を伝える。

ケンブリッジ大学出版局

▼Cambridge Handbooks in Language and Linguistics 3 Volume Pack
（3 HB books 9781107020368 USD 350）
ケンブリッジハンドブック「言語と言語学」シリーズは、対象範囲の広い言語分野に置いて、その研究に必要となる全てを網羅した人気のシリーズです。この度、既に出版されている「危機言語」「音韻論」「言語コードスイッチング」「子どもの言語」に続き、新刊の「言語政策」「社会言語学」「語用論」が三巻パックとなりました。今後も、「文体論」「第二言語習得」等が出版予定です。



個別の巻でもお求めいただけます。
The Cambridge Handbook of Language Policy
（HB 9780521195652 USD 170）
The Cambridge Handbook of Pragmatics
（HB 9780521192071 USD 160）
The Cambridge Handbook of Sociolinguistics
（HB 9780521897075 USD 150）

産業能率大学出版部

▼『**市場縮小時代の成長戦略**』西塚宏著（A5判・二一〇〇円）。日本国内の市場が縮小する中、それでも企業が成長していくための戦略を伝授。
▼『**新装版　孫子の兵法**』守屋洋著（四六判・一五七五円）人間に対する深い洞察によって裏打ちされた孫子の戦略戦術論は人間社会の生きる知恵が満載。
▼『**やさしく学ぶ　IFRS超入門**』市川利夫著（四六判・一五七五円）ビジネスパーソンの基礎知識となるIFRSの重要なポイントを凝縮して徹底解説。
▼『**サービスイノベーション―サービスを創出し付加価値を高める戦略的アプローチ**』（学）産業能率大学総合研究所　サービスイノベーション研究プロジェクト編著（A5判・二六二五円）新たなサービスを創出し、サービスの付加価値を高めるための戦略的アプローチを提案。
▼『**インテリア1次試験問題集**』産業能率大学出版部編著（B5判・二五二〇円）。
▼『**老舗―時代を超えて愛される秘密**』鶴岡公幸著（A5判・一六八〇円）日本を代表する老舗について、愛される老舗となることができた秘密を解き明かす。

専修大学出版局

▼田中隆之編著『**日本経済　その構造変化をとらえる**』（四六判・二六〇頁・一六八〇円）
　日本経済はこの二〇年間に大きく構造変化を遂げ、かつ内外から新たな負荷を背負わされる状況にある。本書では日本の元気な中小企業、農業の原点、東アジアの貿易構造変化、雇用と賃金と労使関係、金融システム、日本の財政等について、今あらためて考え直すという観点から分析・考察を加えている。
▼専修大学今村法律研究室編『**大逆事件と今村力三郎**』（A5判・三五四頁・二九四〇円）
　二〇一〇年から二〇一一年は、幸徳秋水らにかかる大逆事件の裁判、処刑から百年にあたるため、大逆事件に関する様々な書籍が出版されている。本書は『今村力三郎・訴訟記録　大逆事件（一）～（三）』と『今村力三郎「法廷五十年」』に収載した中から主な部分を選択して復刻したものと新たに書き起こした原稿により、今村力三郎の弁護活動を重点的に収録する。

大正大学出版会

近刊

▼TU選書『**天台仏教の教え**』多田孝文監修　塩入法道・池田宗譲編集・四六判・一九九五円）伝教大師最澄は、真言宗を開いた空海と同じ時期に中国に留学し、帰国し、天台宗を開宗した。その教えは中国の天台大師智顗の教学と『法華経』を土台としている。最澄の教えは比叡山を中心に展開され、今日まで一二〇〇年余の法灯が伝えられている。本書は天台教学の理論と実践について、また中国天台の流れ、日本の天台宗の歴史とその展開、比叡山の修行・行事、天台仏教と日本文化などについて論述する。

▼伊福部昭『**交響頌偈「釈迦」**』（楽譜・解説・CD付・B4判・六九三〇円）映画『ゴジラ』の音楽で著名な作曲家伊福部昭の交響偈頌「釈迦」の自筆楽譜を収録。本作品は、釈迦の出家から悟りを開くに至るまでを、全三楽章で構成され、パーリー語による讃歌も歌われる。片山杜秀氏（音楽評論家）が、作品の解説、伊福部の経歴、思想、宗教とのかかわりなどについて論述。初演時のCDを付す。

玉川大学出版部

▼リチャード・D・ハワード編／大学評価・学位授与機構IR研究会訳『**IR実践ハンドブック―大学の意思決定支援―**』（A5判・三七八〇円）学生の学習評価や大学の自己評価、計画策定、意思決定などに役立つインスティテューショナル・リサーチ（IR）の理論と実際。理論的枠組みやデータの収集方法、分析の技術などを網羅的に説明する。

▼中井俊樹・上西浩司編『**大学の教務Q&A**』（A5判・一五七五円）大学教務の業務に必要な実践的知識をQ&A形式で学ぶ。経験豊富な職員らが、入学・学籍・履修などカテゴリー別に現場で蓄積された知識や具体的な対応策を回答。どのように業務を進め、改善できるのか、大学教育に携わる教職員に役立つ指針を示す。

▼中村香・三輪建二編著『**生涯学習社会の展開**』（A5判・二五二〇円）一人ひとりの生涯にわたる学習が個人のみならず組織や社会の発展をも展望する「学習社会」の実現に向けて、生涯学習の諸相を考察する。社会教育関係の資格取得希望者、教員志望者必携の書。確認問題や豊富な資料で、自学自習しやすい構成。

中央大学出版部

▼広岡守穂著『**政治と自己実現**』（二六二五円）政治の目的は、自由な自己実現のための平等な機会を全ての市民に提供することだ、という視点で明治から昭和戦前の思想の発展をあとづけた。福沢諭吉、中江兆民、新渡戸稲造、夏目漱石他、数多くの思想家や文学者を取り上げる。

▼栗山保之著『**海と共にある歴史―イエメン海上交流史の研究―**』（三九九〇円）イエメンはかつて、インド洋と紅海の二つの大洋を通じて、西は北アフリカや地中海北岸、そして東は中国や東南アジアなどの諸地域と、広域的な連関を有するきわめて国際性豊かな地域であった。本書は、このイエメンに関するわが国初の本格的な研究書である。

▼徳重昌志・日高克平編著『**岐路に立つ日本経済・日本企業**』（二九四〇円）グローバル化が進む日本経済と日本企業の現状と課題を学際的かつ総合的に研究。持続可能な日本社会の設計図を描く。

▼金光仁三郎編訳『**フランス民話集**』（四六二〇円）子供から大人まで誰からも愛されてきた昔話。本書はケルトの香りが漂うブルターニュ地方の民話を集録。

東京大学出版会

▼高橋惠子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子編『**発達科学入門**』（全3巻、各巻三五七〇円）

生命科学の進歩、生涯発達という視点の導入により、人間理解が大きな変革を遂げつつある今、心理学を中心に、社会科学、脳科学、医学、生物学など、発達にかかわる科学を総動員。第一線の研究者が、生物―心理―社会的観点からバランスよく網羅的に知見を提供したテキスト。新生児医療から老年期のうつまで、各年代の臨床的要請にも対応する。

『**1巻　理論と方法**』（5月刊）では、シリーズを貫くコンセプト、基本的理論、研究法の基礎を解説し、「発達科学」の全体像を指し示す。

『**2巻　胎児期～児童期**』（2月刊）、『**3巻　青年期～後期高齢期**』（4月刊）では、在胎中のリスク、発達障害、自我の混乱、夫婦関係、認知症などの発達上の課題や、保育の質、いじめ、経済格差、ワーク・ライフ・バランス、介護などの行政・教育上の問題にふれながら、出生前から超高齢期までの各時期の特徴を描き、生涯発達の中でとらえ直していく。

東京電機大学出版局

▼安部正人『**自動車の運動と制御　第2版**』（A5・二八〇頁・三五七〇円）自動車運動工学全体を網羅したバイブル的テキストの第2版。MATLAB/Simulinkのシミュレーションによる自動車の運動の数値計算例を取り入れ、各章の例題や章末問題を大幅に充実させた。また、一部は最新の研究成果を踏まえて加筆修正している。大学のテキストや、自動車関連の研究開発技術者のための入門書として最適な一冊となっている。

▼吉川忠久著『**第4級ハム集中ゼミ**』（A5・二五六頁・一六〇〇円）第4級ハムの受験者が二十一年ぶりに増加した。これは東日本大震災発生時において、無線通信による救援要請が多くの命を救ったことがきっかけであると考えられている。緊急時の通信手段を確保する方策として、アマチュア無線免許を取得しようという動きが病院や地方自治体、公共施設などで広がっているのである。

本書は第4級アマチュア無線試験にこの一冊で合格することを目的にまとめられた。合格に必要な知識解説と、出題頻度の高い練習問題で構成されている。

東京農業大学出版会

▼『**家庭菜園だからできる無農薬栽培―少し科学しよう―**』古谷　正著（B5・二〇三頁・税込価格一六八〇円）

家庭菜園を始めようとすれば、こんなことを知りたいと思う。種はいつまくのか。肥料はどのように施すのか。畑はどのように耕すのか。有機質肥料はなぜよいのか。農薬は使わなくて作れるのか。成功のポイントは、三つある。ポイントの一つ目は、その野菜の性質を知り、生育に適した地域、適した時季に栽培すること、二つ目は土つくり、良い土つくりに有機質肥料は欠かせず、丈夫な野菜は健全な根にあること、三つ目は作物と対話することで、作物をよく観察し、適切な管理をすること、と説いている。

東京農工大学出版会

▼『**人が学ぶ　イヌの知恵**』林谷秀樹・渡辺元・佐藤俊幸・甲だ菜穂子・対馬美香子著（B5判・一六四頁・一四七〇円）

東京農工大学が知的資産を世の中に還元する目的で発行している「人が学ぶ」シリーズの第3弾。

イヌは、いまから4万年ほど前に、野生のオオカミを人間が飼い慣らして創りだしました。それ以来様々な育種を繰り返して、様々な犬種を生み出してきました。

本種では、こうしたイヌの生態や体の仕組み、行動に隠されているイヌの感情など意外と知られていないイヌの習性を平易に解説している。たとえば飼い主にしかられている時にあくびをするのは、飼い主をばかにしているのではなく、自分を落ち着かせようとする合図など、知っているとイヌとの関係を良好にするヒントになる。東京農工大学の獣医学科の教授ら5人による共著。

法政大学出版局

▼J・B・シュナイウィンド／田中秀夫監訳・逸見修二訳『**自律の創成**』（一三六五〇円）カントによる「自律」としての道徳観の創成を解明すべく、近代の道徳思想史を網羅的に分析し考察する。

▼P・ティリッヒ／清水正・濱崎雅孝訳『**諸学の体系**』（三三六〇円）学問の存在意義と大学の理念が問いなおされる現在、あらためて読まれるべき神学者ティリッヒによる一九二三年の学問論。

▼野口雅弘著『**比較のエートス**』（三〇四五円）ウェーバーにおける〈比較〉の契機に注目しつつ、その政治理論を冷戦終焉後の現代政治の文脈に置き入れ、その概念やテクストを再検討する。

▼松沼美穂著『**植民地の〈フランス人〉**』（四四一〇円）民主主義と人権の共和国はいかに自他を差別化し、不平等な他民族支配を正当化しえたのか。その「包摂と排除」のメカニズムを解明する。

▼有岡利幸著『**桃**』（三三六〇円）魔除けや若返りの力をもつ神聖な果実と言い伝えられ、宮廷祭祀との関連が注目される桃。桃太郎や桃源郷の伝説、雛祭りなど、日本人との多彩な関わりを考える。

武蔵野大学出版会

▼廣瀬裕之著『**刻された書と石の記憶**』（二二〇〇円）全国の公園や史跡に多数存在する石碑。本書ではそれらの中から東京・武蔵野市の玉川上水沿いに建つ三基の石碑をとりあげ、書（揮毫）と刻と石の三要素から碑を読み解き、石碑という塊に対する新しい見方を示してくれる。

著者は「碑の書の研究には、拓本が有効である、拓本の採り方は…、道具は…」と、実践を交えて語るかと思えば、それぞれの碑の由来を当時の新聞記事や配布された印刷物などをたずね当てて調べていく。また一方では碑の石材の出所をたずねて山の石切場跡まで駆けつける。さらに、拓本の比較から書の特徴の見方を解説する。豊富な写真や図版が理解を助け、書道に縁の薄い読者にも興味深い。

取り上げた三基のうち二基は国木田独歩の詩碑と文学碑で、著者の独歩と「武蔵野」への思いがうかがわれる。残る一基は、太宰治の小説にも登場する「松本訓導殉難事件」の碑である。この大型の碑では、中国由来の伝統的な石碑の様式の説明も詳しく、全国の観光地等に建つ大型石碑を見る際の参考になる。

武蔵野美術大学出版局

▼**『造形ワークショップを支える―ファシリテータのちから』**高橋陽一著（A5判・二四〇頁・一七〇〇円）

ファシリテータとは、ワークショップの企画者であり、同時に、参加者をそっと後ろから見守る人である。では、どのような能力が求められるのだろうか？

第一章は、造形ワークショップ理論編。語義の歴史的変遷から、現状を三段階に区別し、教育学的立場から解説。

第二章から第四章は実践編。「企画力」「組織力」「記録力」をキーワードに、この三つの能力の磨き方や、工夫のノウハウを示すのみならず、どのように社会に働きかけていくかを提起する。

圧巻は第五章「質疑応答」。「ファシリテータは職業なのか」「学校の美術教育と造形ワークショップは矛盾するか」「造形ワークショップの評価は可能か」。こうしたQ&Aから浮かび上がってくるのは「なぜアートなのか」という根源的な問いである。自由な表現が許される造形世界にこそ、「個」を認め合う「個」の尊重がある。アートにかかわるすべての人に、あらためてそのちからを問う。

明星大学出版部

▼**『教育原理』**佐々井・樋口・廣嶋著（A5判・一九〇頁・一四七〇円）

教職課程の最も基本的な科目。教育の考え方、理念及び東西の教育の歴史を解説し、また我が国の戦後教育の歩みと変容を振り返り、現在の課題を展望する。

▼**『道徳教育の指導法』**佐々井・岩木・森下著（A5判・一八二頁・一四七〇円）

道徳教育の学習は、教壇に立つことを想定して実践的な指導法を身につけることが眼目となる。具体的な指導例、学習案を紹介しながら、必要事項を網羅する。

▼**『追補　生徒指導―小学校―』**味形修著（A5判・一九〇頁・一三六五円）

小学校の生徒指導を、児童理解、教育課程、学級経営、学校内外の連携、保護者対応、進路指導としてのキャリア教育の観点から考える。

▼**『教育委員会制度変容過程の政治力学～戦後初期教育委員会制度史の研究～』**樋口修資著（A5判上製・二九八頁・三三六〇円）

▼**『実業学校から見た近代日本の青年の進路』**井澤直也著（A5判上製・一七六頁・二六二五円）

関東学院大学出版会

▼斎藤囲・本間英夫・山下嗣人著**『新めっき技術』**（三三六〇円）電気めっきと無電解めっきを中心に、その原理・分類などの基礎知識から各種めっき技術、エレクトロニクスをはじめとする最先端分野への応用について、最新の研究成果を含めて解説する。

▼中村克明著**『植木枝盛―研究と資料』**（一八九〇円）自由民権最高の思想家と評される植木枝盛の人権・政治思想の問題点を、彼の起草した憲法案を手がかりとして明らかにすると共に、植木に関する文献目録等を収録する。

東海大学出版会

▼『**高度一万メートルから見たオーロラ―サイクル23の光跡**』國分勝也著・写真／佐藤夏雄・利根川豊監修（定価二一〇〇円）

▼『**生態進化発生学―エコ・エボ―デボの夜明け**』スコットF・ギルバード他著／正木真三他訳（定価六〇九〇円）

▼『**アリストテレス哲学における人間理解の研究**』渡辺邦夫著（定価四三〇五円）

▼『**ケトスの知恵―イルカとクジラのサイエンス**』村山司・森阪匡通編著（定価二九四〇円）

▼『**日本の昆虫館―戦前と戦後のあゆみ**』矢島稔著（定価二九四〇円）

▼『**フィールドの生物学⑥：右利きのヘビ仮説―追うヘビ、逃げるカタツムリの右と左の共進化**』細将貴著（定価二一〇〇円）

▼『**フィールドの生物学⑦：テングザル―河と生きるサル**』松田一希著（定価二一〇〇円）

▼『**minimum②：エネルギー入門**』鶴岡靖彦著（定価一二六〇円）

▼『**品種論**』田中孝幸著（定価七二四五円）

名古屋大学出版会

▼『**老年と正義―西洋古代思想にみる老年の哲学―**』瀬口昌久著（三七八〇円）老いは単に福祉の対象ではない。老年を内面から支える精神的基盤を問い直す。

▼『**肖像画の時代―中世形成期における絵画の思想的深層―**』伊藤大輔著（六九三〇円）絵巻物から肖像画へ――変革期に、絵画は何を語り出そうとしたのか。

▼『**二〇世紀環境史**』J・R・マクニール著、海津正倫／溝口常俊監訳（五八八〇円）「歴史学と生態学の統合」を目指すグローバル環境史の名著。

▼『**「大東亜共栄圏」経済史研究**』山本有造著（五七七五円）日本帝国はどのように崩壊したか。「大東亜共栄圏」の全容を初めて客観的に描き出す。

▼『**現代中国の財政金融システム―グローバル化と中央‐地方関係の経済学―**』梶谷懐著（五〇四〇円）独自の財政金融システムの全体像を示し、グローバル不均衡や人民元改革問題にも光をあてる。

▼『**最新 人工心肺［第四版］―理論と実際―**』上田裕一編（六三〇〇円）基礎から応用まで解説した、好評テキストの最新版。初学者への配慮を加えた。

三重大学出版会

▼『**地質要因からみた安全安心な斜面管理―斜面のリスク・クライシスマネジメント―**』相澤泰造著、二〇一二年三月刊（A5版・一四六頁・定価二一〇〇円）

まえがき
第1章　序論　目的と検討方法
第2章　三重県における地質帯・岩相と斜面破壊形態の特徴
第3章　三重県以外の岩相と斜面破壊事例
第4章　切土法面の膨張
第5章　豪雨と土砂災害
第6章　斜面破壊の規制要因
第7章　地質要因ごとの斜面破壊形態の特徴と斜面災害危険箇所の抽出
第8章　斜面破壊のリスク・マネジメントとクライシス・マネジメント
第9章　総括　参考文献　用語解説

身の周りの平凡な斜面でも、地質や岩相をとらえることで科学的な分析の対象になる。また自然・災害・土木の学びの材料となるし、日々の生活の安全・安心の支柱になります。

▼第10回日本修士論文賞、募集開始。締切り、本年三月一五日。

京都大学学術出版会

▼『**要説 地質年代**』J・G・オッグ、G・M・オッグ、F・M・グラッドシュタイン著／鈴木寿志訳（予価三五七〇円）四五億年の地球史を語る上で、地質年代の理解は欠かせない。本書は、国際標準化を目指し刻々と改訂される地質年代区分の最前線を、詳細かつ明快に示すハンドブックである。地球科学の学生・研究者、および石油鉱業従事者必携の書。

▼『**数，方程式とユークリッド幾何―数学の古典から折り紙の数学まで**』西田吾郎著（予価二九四〇円）数と図形―両者の研究は、数学の長い歴史を通して、相互に関連し合いながら発展してきた。「数とは何か？」から始め、数論・代数幾何・解析学など現代数学の基礎を相互に関連付けながら平易に解説する。

▼『**認知と指示　定冠詞の意味論**』小田涼著（四二〇〇円）冠詞は難しい、例外がありすぎる……それは本当か？言葉が置かれる「場」に着目する認知論的方法を用い、「いかなる場・解釈領域を背景として名詞句は解釈されるのか」を分析することで、冠詞の用法に明確な説明を与える画期的研究。

大阪経済法科大学出版部

▼『**環境と海洋―海から見直す環境―**』細田龍介・山田智貴共著（予価一八九〇円）四月刊行予定。

地球の歴史から見ればほんの一瞬にしか過ぎないこの二百年足らずの間の科学技術の進歩は、我々人類の繁栄に大きく寄与したことは周知であるが、一方で人類の繁栄を支え続けてきた身のまわりの自然や生態系には大きな負担を強い続けていることが認識され始めて未だ半世紀にもならない。しかも、その負担の終着駅は「海」なのである。人類が母なる海から受けてきた恩恵は計り知れないほど大きいことは誰もが知っている。しかし、人類が日常の生活や社会・経済活動を通して海洋にかけてきた負荷の大きさも計り知れないほど大きい。（前書より）

目次　①地球システムと海洋・海域／②海洋における物理現象／③海洋における生物と生態系／④海洋調査・探査／⑤海洋資源とその利活用／⑥海洋空間利用／⑦地球規模の環境問題／⑧沿岸域の環境問題／⑨人間生活・活動と沿岸域環境／⑩環境保全・改善／⑪環境認識、市民生活と環境意識

大阪大学出版会

▼富澤芳亜・久保亨・萩原充編著『**近代中国を生きた日系企業**』（A5判・五二五〇円）企業国際化の起源は中国にあった！日中両国の新資料を駆使し、日系企業の実像を解明した初の国際共同研究。

▼囹府寺司編著『**ああ、誰がシャガールを理解したでしょうか？―二つの世界間を生き延びたイディッシュ文化の末裔**』（四六判・二一〇〇円・CD付き）革命と冷戦の二〇世紀を、シャガールはどう生きたか。絵と資料からその実像に迫る。

▼須藤訓任著『**ニーチェの歴史思想―物語・発生史・系譜学**』（A5判・五四六〇円）物語なきあとに歴史は可能か？ニーチェ思想のたどり着いた「偶然としての歴史」の方法論と射程の全貌。

▼服部憲児著『**フランスCNEによる大学評価の研究**』（A5判・四四五〇円）大学評価機関、CNEが残した成果の軌跡を追い、評価から改善への道筋を示す。

▼土岐 博・保坂 淳著『**相対論的多体系としての原子核―相対論的平均場理論とカイラル対称性**』（A5判・電子版九八〇円、オンデマンド版二一〇〇円）新しい、面白い段階にある原子核物理を学ぶ。

関西大学出版部

▼孝忠延夫編著『**差異と共同―「マイノリティ」という視角―**』（A5判・四四一〇円）二一世紀グローバル市民社会における「国民国家」のあり方を「マイノリティ」を手がかりに考察する。多様な差異の中にこそ、新たな〈共同〉の可能性とその姿があるのではないかという問題意識を共有する。

▼鰺坂真著『**ドイツ古典哲学の本質と展開**』（A5判・三四六五円）カントからヘーゲルにいたるドイツ古典哲学の特質とその歴史的な展開を追及する。カント哲学の特徴と、これをもとにして発展してきたシェリングおよびヘーゲルの弁証法論理の展開などの解明を目指す。

▼永田憲史著『**わかりやすい刑罰のはなし―死刑・懲役・罰金―**』（四六判・一五七五円）光市事件の最高裁判所の判決で死刑の基準は変わったのか。どこの刑務所に入るかはどう決まるのか。懲役の受刑者は月にいくらもらえるのか。罰金を払わないとどうなるのか。罰金と交通反則金はどう違うのか。意外に知られていない刑罰の仕組みなど、六〇のテーマについて分かりやすく解説。

関西学院大学出版会

▼山本健太郎著『**ドゴールの核政策と同盟戦略―同盟と自立の狭間で**』（A5上製・二〇八頁・定価三三六〇円）フランス外交史におけるドゴール主義の研究。

▼廣田佳彦著　K．G．りぶれっとNO．29『教育方法の本質』（A5並製・七二頁・定価七三五円）教育養成および教職課程における「教育方法」の基本問題を教授・学習理論を中心に、その本質解明を試みる。

▼徳崎進著『**VBMにおける業績評価の財務業績効果に関する研究―事業単位の価値創造と利益管理・原価管理の関係性**』（A5上製・一二六二頁・定価三九九〇円）VBMと部門経営の関係性について、事業単位の観点から株主価値創出のためのマネジメント・システムの開発可能性を検討する。

▼佐伯千鶴著『**SIGHTLESSA MBASS ADORS―Iwahashi Takeo and His Followers' Cultural Diplomacy through Social Welfare for the Blind in Asia,1937-1957**』（A5並製・一四二頁・定価二三一〇円）岩橋武夫とその生徒達についての英文研究書。

九州大学出版会

▼高原朗子編『**発達障害児の生涯支援―社会への架け橋「心理劇」―**』（A5判・二九四〇円）発達障害児の成長に応じた支援に有効な心理劇療法の理論と実践。震災時の支援や一般児童への応用についても触れる。平成二十三年度日本生命財団学術書出版助成書目。

▼田尻義了『**弥生時代の青銅器生産体制**』（B5判・七九八〇円）鋳型と製品の両者から分析を進め、弥生時代の各時期の青銅器生産体制を復元する。青銅器鋳型と小形仿製鏡の最新集成表付。

▼細川亮一『**要請としてのカント倫理学**』（A5判・六〇九〇円）純粋実践理性の根本法則を理性の事実から意志へ、さらに実践的命題としての要請へと問い深めることによって、カント倫理学を意志の要請として捉える。

▼太田一昭『**英国ルネサンス演劇統制史―検閲と庇護―**』（A5判・八四〇〇円）検閲者たる宮廷祝典局長と演劇人との共生関係に着目し、禁圧的とされてきた近代初期英国の演劇統制制度がむしろ演劇を保護し、一定の「表現の自由」を与えていたと論じる。

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2012年 4 月 1 日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル7F
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
株式会社粂川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 6F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
ベル製本株式会社	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
宗教法人法界寺	〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒104-8243 東京都中央区銀座6-17-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

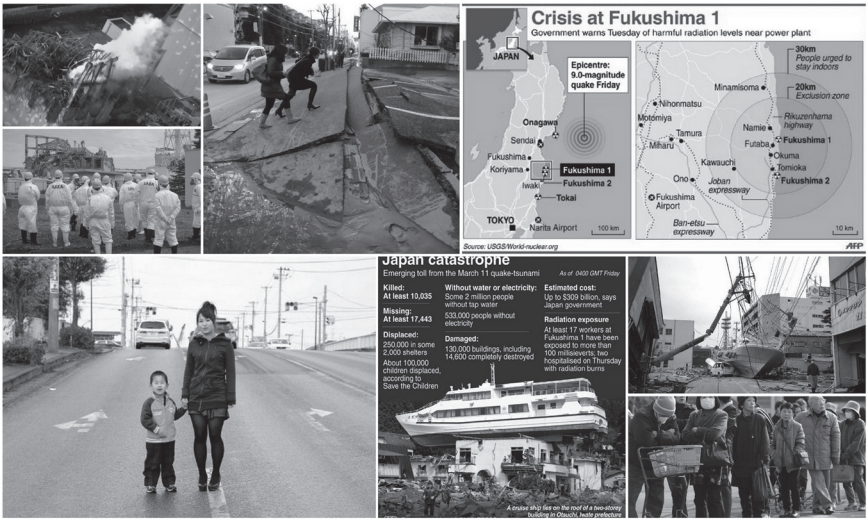
岩波書店	〒101-8002	東京都千代田区一ツ橋2-5-5
みすず書房	〒113-0033	東京都文京区本郷5-32-21
御茶の水書房	〒113-0033	東京都文京区本郷5-30-20
未來社	〒112-0002	東京都文京区小石川3-7-2
吉川弘文館	〒113-0033	東京都文京区本郷7-2-8
藤原書店	〒162-0041	東京都新宿区早稲田鶴巻町523

AFPWAA 特別編集 DVD　全６巻［英語版］

Japan one year after 3.11

「AFP 通信が世界に配信した東日本大震災」

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、東北地方、関東地方の広い範囲で発生した日本での観測史上最大規模の地震は、引き続き起こった大津波、福島第一原子力発電所の放射能漏洩を伴う大事故により、壊滅的な被害を引き起こしました。世界で最も長い歴史を持つフランスの AFP 通信では、災害発生当日から世界中にニュースを配信。それら膨大な報道ニュースの中から厳選した写真記事や映像を、明治大学阪井和男教授の監修の下、再構築し、テーマ別に編集した DVD「Japan one year after3.11 / AFP が世界に配信した東日本大震災」全６巻をリリースいたします。3.11 から現在までを時系列で、あるいは地域別に分類し収録されたデジタルコンテンツの数々は、決して忘れてはならない１年間の記録です。資料的価値は高く、学術・教育・研究目的にもお使いいただけます。



■ 監修：明治大学法学部　阪井和男教授

■ 収蔵コンテンツ

・全６巻収録写真点数　650 点　収録動画　105 点　計　755 点

・収録写真のキャプション（写真解説　英語）及び、動画のスクリプト（英語）

■ 編集：文化学園アカデミックアーカイブセンター

全６巻　各巻　4,830 円／全６巻セット　23,940 円（価格はすべて配送料、税込）

［お問い合わせ／お申し込み］

学校法人文化学園 アカデミックアーカイブセンター

〒151-8521　東京都渋谷区代々木 3-22-1

Tel : 0120 - 021 - 311　info@afpwaa.com

一般社団法人
大学出版部協会
加盟出版部一覧

NESE
ERSITY
SSES

90
2.4
ING

大学出版90号（2012年春）
2012年4月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：
一般社団法人大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北
1丁目14番13号
メゾン萬六403号室

TEL: 03-3511-2091
E-MAIL: mail@ajup-net.com
URL: http://www.ajup-net.com/

使用書体：
秀英明朝, M, B
Sabon, Roman
使用紙：
紀州の色上質 特厚口 あじさい

表紙デザイン：
白井敬尚形成事務所

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL: 011-747-2308 FAX: 011-736-8605

弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1
弘前大学附属図書館内
TEL: 0172-39-3168 FAX: 0172-39-3171

東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778

流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL: 0297-64-0001 FAX: 0297-60-1165

聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL: 048-725-9801 FAX: 048-725-0324

聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL: 047-365-1111 FAX: 047-363-1401

麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL: 04-7173-3320 FAX: 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL: 03-3451-3168 FAX: 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局
〒140-0002 品川区東品川1-32-5
TEL: 03-5479-7265 FAX: 03-5479-8277

産業能率大学出版部
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12
サピアタワー9階
TEL: 03-6266-2400 FAX: 03-3211-1400

専修大学出版局
〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2
専修大学購買会別館2階
TEL: 044-911-7179 FAX: 044-911-1382

大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL: 03-5394-3026 FAX: 03-5394-3038

玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL: 042-739-8935 FAX: 042-739-8940

中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL: 042-674-2351 FAX: 042-674-2354

東京大学出版会
〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL: 03-3811-8814 FAX: 03-3812-6958

東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL: 03-5280-3433 FAX: 03-5280-3563

東京農業大学出版会
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL: 03-5477-2666 FAX: 03-5477-2747

東京農工大学出版会
〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内
TEL: 0423-67-6700 FAX: 0423-67-6700

法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7
法政大学一口坂校舎内
TEL: 03-5214-5540 FAX: 03-5214-5542

武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL: 042-468-3003 FAX: 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL: 0422-23-0810 FAX: 0422-22-8309

明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL: 042-591-9979 FAX: 042-593-0192

関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL: 045-786-7164 FAX: 045-786-9898

東海大学出版会
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35
東海大学同窓会館3階
TEL: 0463-79-3921 FAX: 0463-69-5087

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL: 052-781-5027 FAX: 052-781-0697

三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学図書館3階
TEL: 059-232-1356 FAX: 059-232-1356

京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京大吉田南構内
TEL: 075-761-6182 FAX: 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL: 072-941-8211 FAX: 072-941-9979

大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL: 06-6877-1614 FAX: 06-6877-1617

関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL: 06-6368-0238 FAX: 06-6389-5162

関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL: 0798-53-7002 FAX: 0798-53-9592

九州大学出版会
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL: 092-641-0515 FAX: 092-641-0172